

ハイパー 小倉百人一首

作者名をクリックするとリンク
辺境文庫PDF製作

1

天智天皇

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ

わが衣手は露にぬれつつ

2

持統天皇

春過ぎて夏来にけらし白妙の

衣ほすてふ天の香具山

3

柿本人麿

足曳きの山鳥の尾のしだり尾の

ながながし夜をひとりかも寝む

4

山部赤人

田子の浦にうち出でて見れば白妙の

富士の高嶺に雪は降りつつ

5

猿丸大夫

奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の

声きく時ぞ秋は悲しき

6

中納言家持

鵲のわたせる橋に置く霜の

白きを見れば夜ぞ更けにける

7

安倍仲磨

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

8

喜撰法師

わが庵は都のたつみしかぞすむ

世をうち山と人はいふなり

9

小野小町

花の色は移りにけりないたづらに

わが身世にふるながめせしまに

10

蝉丸

これやこの行くも帰るも別れては

しるもしらぬも逢坂の関

1 1 参議篁

わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと
人には告げよ海人の釣船

1 2 僧正遍昭

天つ風雲の通ひ路吹きとぢよ
乙女の姿しばしとどめむ

1 3 陽成院

筑波嶺の峯より落つる男女の川

こひぞつもりて淵となりぬる

1 4 河原左大臣

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆゑに

みだれそめにし我ならなくに

1 5 光孝天皇

君がため春の野に出でて若菜つむ
わが衣手に雪は降りつつ

16 中納言行平

立ち別れ稲葉の山の峯に生ふる

まつとし聞かば今帰り来む

17 在原業平朝臣

ちはやぶる神代もきかずたつた川

からくれなるに水くくるとは

18 藤原敏行朝臣

住の江の岸に寄る波よるさへや

夢の通ひ路人めよくらむ

19 伊勢

難波潟短き蘆のふしの間も

逢はでこの世をすぐしてよとや

20 元良親王

わびぬればいまはた同じ難波なる

みをつくしても逢はむとぞ思ふ

2
1

素性法師

今来むといひしばかりに長月の

有明の月を待ち出でつるかな

2
2

文屋康秀

吹くからに秋の草木のしをるれば

むべ山風を嵐といふらむ

2
3

大江千里

月見ればちぢに物こそかなしけれ

わが身ひとつの秋にはあらねど

2
4

菅家

このたびは幣もとりあへず手向山

紅葉のにしき神のまにまに

2
5

三条右大臣

名にしおはば逢坂山のさねかづら

人に知られでくるよしもがな

26

貞信公

小倉山峰のもみぢば心あらば

今一度の御幸待たなむ

27

中納言兼輔

みかの原わきて流るるいづみ川

いつみきとてか恋しかるらむ

28

源宗于朝臣

山里は冬ぞ寂しさまさりける

人目も草もかれぬと思へば

29

凡河内躬恒

心あてに折らばや折らむ初霜の

置きまどはせる白菊の花

30

壬生忠岑

有明のつれなく見えし別れより

暁ばかりうきものはなし

3
1 坂上是則

朝ぼらけ有明の月と見るまでに

吉野の里に降れる白雪

3
2 春道列樹

山川に風のかけたる柵は

流れもあへぬ紅葉なりけり

3
3 紀友則

ひさかたの光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらむ

3
4 藤原興風

誰をかも知る人にせむ高砂の

松も昔の友ならなくに

3
5 紀貫之

人はいさ心も知らずふるさとは

花ぞ昔の香ににほひける

3
6

清原深養父

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを
雲のいづこに月宿るらむ

3
7

文屋朝康

白露に風の吹きしく秋の野は
つらぬき止めぬ玉ぞ散りける

3
8

右近

忘らるる身をば思はず誓ひてし

人の命の惜しくもあるかな

3
9

参議等

浅茅生の小野の篠原しのぶれど

あまりてなどか人の恋しき

4
0

平兼盛

忍ぶれど色に出でにけりわが恋は
物や思ふと人の問ふまで

4 1 壬生忠見

恋すてふ我が名はまだき立ちにけり
人知れずこそ思ひそめしか

4 2 清原元輔

契りきなかたみに袖をしぼりつつ
末の松山浪こさじとは

4 3 中納言敦忠

逢ひ見ての後の心にくらぶれば

昔は物を思はざりけり

4 4 中納言朝忠

逢ふことの絶えてしなくばなかなか
に人をも身をも恨みざらまし

4 5 謙徳公

あはれとも言ふべき人は思ほえで
身のいたづらになりぬべきかな

46 曾根好忠

由良の門をわたる舟人かぢをたえ

ゆくへも知らぬ恋のみちかな

47 恵慶法師

八重葎しげれる宿のさびしきに

人こそ見えね秋は来にけり

48 源重之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ

くだけでものを思ふ頃かな

49 大中臣能宣朝臣

御垣守衛士の焚く火の夜は燃え

昼は消えつつ物をこそ思へ

50 藤原義孝

君がため惜しからざりし命さへ

長くもがなと思ひけるかな

5 1 藤原実方朝臣

かくとだにえやは伊吹のさしも草
さしも知らじな燃ゆる思ひを

5 2 藤原道信朝臣

明けぬれば暮るるものとは知りなが
らなほ恨めしき朝ぼらけかな

5 3 右大将道綱母

歎けきつつひとりぬる夜の明くる間

はいかに久しきものとかは知る

5 4 儀同三司母

忘れじの行末まではかたければ
今日をかぎりの命ともがな

5 5 大納言公任

瀧の音は絶えて久しくなりぬれど
名こそ流れてなほ聞えけれ

56 和泉式部

あらざらむこの世のほかの思ひ出に
今一度の逢ふこともがな

57 紫式部

めぐりあひて見しやそれともわかぬ
間に雲隠れにし夜半の月かな

58 大弐三位

有馬山猪名の笹原風吹けば

いでそよ人を忘れやはする

59 赤染衛門

やすらはで寝なましものをさ夜ふけ
てかたぶくまでの月を見しかな

60 小式部内侍

大江山生野の道の遠ければ
まだふみも見ず天の橋立

6
1 伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重桜

今日九重に匂ひぬるかな

6
2 清少納言

夜をこめて鳥のそらねははかるとも
よに逢坂の関はゆるさじ

6
3 左京大夫道雅

今はただ思ひ絶えなむとばかりを

人づてならでいふよしもがな

6
4 権中納言定頼

朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに

あらはれ渡る瀬々の網代木

6
5 相模

恨みわび乾さぬ袖だにあるものを
恋に朽ちなむ名こそ惜しけれ

66

前大僧正行尊

もろともにあはれと思へ山桜

花よりほかに知る人もなし

67

周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕に

かひなく立たむ名こそ惜しけれ

68

三条院

心にもあらでうき世にながらへば

恋しかるべき夜半の月かな

69

能因法師

嵐吹く三室の山のもみぢ葉は

龍田の川の錦なりけり

70

良暹法師

さびしさに宿を立ち出でてながむれ

ばいづこも同じ秋の夕暮

7 1 大納言経信

夕されば門田の稲葉おとづれて

蘆のまる屋に秋風ぞ吹く

7 2 祐子内親王家紀伊

音に聞く高師の浜のあだ浪は

かけじや袖の濡れもこそすれ

7 3 前中納言匡房

高砂の尾の上の桜咲きにけり

外山の霞立たずもあらなむ

7 4 源俊頼朝臣

憂かりける人を初瀬の山おろし

はげしかれとは祈らぬものを

7 5 藤原基俊

契りおきしさせもが露を命にて

あはれ今年の秋もいぬめり

76

法性寺入道前関白太政大臣

わたの原漕ぎ出でて見ればひさかた
の雲るにまがふ沖つ白波

77

崇徳院

瀬を早み岩にせかるる瀧川の
われても末に逢はむとぞ思ふ

78

源兼昌

淡路島通ふ千鳥の鳴く声に

幾夜ねざめぬ須磨の関守

79

左京大夫顕輔

秋風にたなびく雲の絶え間より
もれいづる月の影のさやけさ

80

待賢門院堀川

長からむ心も知らず黒髪の
乱れて今朝はものをこそ思へ

8 1 後徳大寺左大臣

ほととぎす鳴きつる方をながむれば
ただ有明の月ぞ残れる

8 2 道因法師

思ひわびさても命はあるものを
憂きに堪えぬは涙なりけり

8 3 皇太后宮大夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひ入る

山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

8 4 藤原清輔朝臣

ながらへばまた此の頃やしのばれむ
憂しと見し世ぞ今は恋しき

8 5 俊恵法師

夜もすがら物思ふころは明けやらで
閨のひまさへつれなかりけり

86

西行法師

嘆けとて月やは物を思はする

かこち顔なるわが涙かな

87

寂蓮法師

村雨の露もまだ乾ぬ槇の葉に

霧立ちのぼる秋の夕暮

88

皇嘉門院別当

難波江の蘆のかりねの一夜ゆるゑ

身をつくしてや恋わたるべき

89

式子内親王

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば

忍ぶることの弱りもぞする

90

殷富門院大輔

見せばやな雄島の海人の袖だにも

濡れにぞ濡れし色はかはらず

9 1 後京極摂政前太政大臣

きりぎりすなくや霜夜のさ蒔に

衣かたしきひとりかも寝む

9 2 二条院讃岐

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の

人こそ知らね乾くまもなし

9 3 鎌倉右大臣

世の中は常にもがもな渚漕ぐ

あまの小舟の綱手かなしも

9 4 参議雅経

み吉野の山の秋風さ夜ふけて

ふるさと寒く衣うつなり

9 5 大僧正慈円

おほけなくうき世の民におほふかな

わが立つ袖に墨染の袖

96 入道前太政大臣

花さそふ嵐の庭の雪ならで

ふりゆくものはわが身なりけり

97 権中納言定家

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに

焼くや藻塩の身もこがれつつ

98 従二位家隆

風そよぐならの小川の夕暮れは

みそぎぞ夏のしるしなりける

99 後鳥羽院

人も惜し人も恨めしあぢきなく

世を思ふゆゑにも思ふ身は

100 順徳院

百敷や古き軒端のしのぶにも

なほあまりある昔なりけり